品子古典鑑賞

与謝野晶子選集 IV

●与謝野光・新間進一＝編集

春秋社版

略　　歴

与謝野光（よさのひかる）　明治36年1月，与謝野寛・晶子の長男として東京に生まる．大正15年慶大医学部卒業．厚生省公衆衛生院教授，東京都防疫課長，東京都衛生局長等を歴任，現在東京医科大学理事同大学高等看護学校校長，慶大文学部講師．医学博士．第三次『明星』主宰．

新間進一（しんましんいち）　大正6年9月東京都に生まる．昭和15年東大文学部国文学科卒業．北大助教授，文部省教科書調査官を経て，現在青山学院大学教授．専攻――中世歌謡，近代短歌．著書『歌謡史の研究』『明治大正短歌史』その他．

晶子古典鑑賞　〔与謝野晶子選集・4〕

昭和42年4月5日　第1刷発行　定価 ¥300

検印省略

編者　与謝野光　新間進一

発行者　東京都千代田区外神田2の18　野口兵蔵

印刷者　東京都台東区寿3の11の13　市川印刷株式会社

発行所　東京都千代田区外神田2の18　株式会社 春秋社

電話（255）9611～5　振替 東京 24861

（小林製本）　落丁・乱丁本はお取替えいたします。

N.D.C. 918

目次

紫式部新考……五
紫式部――日本女性列伝……三二
『新新訳源氏物語』あとがき……三七
源氏関屋……四〇
和泉式部新考……四三
和泉式部の歌……八〇
清少納言の事ども……九二
栄華物語上巻解題……一〇〇
栄華物語下巻解題……一一〇
御堂関白記解題……一一六
御堂関白歌集の後に……一二五

絵巻のために（源氏物語・栄華物語・平家物語）……一三八
平安朝の恋……一三四
古典の研究……一四〇
冬柏亭雑記（抄）……一四三
読書、虫干、蔵書……一四六
鰹……一五〇
対牡丹記……一五三
与謝蕪村……一五七
補　注……一八四
『晶子古典鑑賞』出典一覧……一九二
晶子と古典文学……新間進一……一九四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

晶子古典鑑賞

凡例

一、本巻には、与謝野晶子の日本古典文学についての業績の中から、主として、鑑賞・評論・研究に関するものを収めた。そのうち日本古典全集本の『栄華物語』上下、『御堂関白記』の三つの解題は、晶子と寛・正宗敦夫三家の手に成るものであるが、専ら晶子の考えが中心と考えてよいと思うのでここに収録した。その大きな仕事である口語訳の類は、紙数の都合で省いたが、もと小説として発表され『新訳源氏物語』の一章を成す「源氏関屋」の一文を見本的に示した。また「絵巻のために」「鰹」の二つはむしろ創作の領域に入るが、便宜上、併載した。

一、原則として、単行本に掲載されたものによったが、若干の例外がある。巻末の「『晶子古典鑑賞』出典一覧」参照。

一、原文の旧仮名づかいを現代仮名づかいに改め、漢字を当用漢字の新字体にし、また適宜漢字を仮名に改めて読みやすくした。ルビはできるだけ不用のものを省き、また若干新しく加えた。原文の誤りは、きわめて明白なものに限り訂正したが、引用文などはなるべくそのままとした。

一、晶子の古典鑑賞は大きな歴史的意義を持つが、何といっても時代の差がある。それで昭和の国文学界の研究の進展に伴う、晶子説への修正・批判の跡や、読解上の参考事項を、巻末の補注の欄に一括して示した。これは主要なものにとどめてある。従って読者にあっては、晶子の論全体をそのまま受け取られることなく、適宜補注その他参考書を参看、これをあくまでも歴史的な時点に置いた上での批判的な精読をお願いする。

なお補注作成につき、寺本直彦・木村正中両氏の教示を得た点がある。

紫式部新考

私は大正五年に紫式部の伝記を書いた。[1] その後に発見したことを加えて、ここに「紫式部新考」を書く。

「此世をば我世とぞ思ふ望月の欠けたる事も無しと思へば」と歌った藤原道長の栄華の絶頂を見るに至らずして歿したにせよ、紫式部は、その道長を中心とした平安朝中期の文芸復興期に際会し、自らその文芸復興に先駆(さきが)けて大きな貢献を文学の上に成したのみならず、永く後世の文学といわず、すべての芸術にまで限りなき影響を与え、今日もなおその大作『源氏物語』が古典文学の中に太陽のごとき光を放っているということは、西暦十世紀の世界に、ことに僻遠な東方の日本に生まれた一女詩人の遺した功績として、まことに奇蹟的の事実といわねばならない。この人の伝記は、日本文学史上の他の著名な人々とともに不明なるところが多く、また平安末期以来の考証家と随筆家とがとくに神秘にしようとして附会したところや、かつ学問の衰えた鎌倉・室町両時代に、史実に拠らないで俗説を捏造して添えたところがあるがために、現代の文学史家、国文学者たちが依然としてそれらの旧い誤りを踏襲せられている状態にあるのは遺憾である。例えば紫式部の娘は一人しかなく、その一人の娘が時を異にして「越後の弁」といわれ「大弐三位(だいにのさんみ)」といわれたのであることを、私が十年前の「紫式部考」において述べておいたにかかわらず、近く出た『日本文学大系』の『源氏物語』の解題に、尾上博士がこれを二人の娘の名とせられ、[2] また近く雑誌『国語と国文学』四十四号において、石村貞吉氏が「紫式部と大弐三位」と題し、私のかつて述べたのと同じことを今さら新しい研究として発表せられている。文豪の伝記は、欧州における十五、六世紀以来の名家でさえ、なお研究を要するものが多いのであるから、伝記学の等閑にせられた我が国において、それ以前の文学者の事蹟が今日も詳細を尽くさないのはやむをえないことであるが、今後

は新しい多くの考証家が現われて、その協力と研究とによって、紫式部を始め多くの文学者の伝記を明らかにしていただきたい。私のここに書くところが、少しでもそれらの考証家の参考になるならば幸いである。

紫式部は、太政大臣藤原冬嗣七世の孫に生まれた。曽祖父権中納言三位兼輔（西暦八七七・元慶元年――九三三・承平三年）は文学者であった。加茂川に近く家を構えて住んだので、世に「堤中納言」といわれ、その著作した小説を『堤中納言物語』といわれたのであるが、早く散佚して、現に残っている同名の小説は後人の擬作である。[3] 兼輔の書いたその小説が、我が国の小説の嚆矢である。また歌人としては貫之の親しき友であり、その佳作が多く『古今集』以下の勅撰集に採られている。人口に膾炙している「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな」という歌は、その作である。紫式部が小説家たり歌人たる素質は、この曽祖父からの遺伝であった。

兼輔の子が歌人にして刑部大輔になった雅正、雅正が右大臣源定方の女と婚して生んだのが太皇太后宮亮右中将にして歌人である為頼、および紫式部の父の為時である。為時は大学の卒業生、すなわち「文章生」にして当時の大儒、文章博士菅原文時に学び、詩賦文章に秀で、その名は同門の藤原孝道、[4] 源為憲の上にあった。兼ねて和歌をも善くし、漢詩は『本朝麗藻』の現存脱落の本にも十三首を留め、和歌は『後拾遺集』以下の勅撰集に採られている。すなわち儒者、漢詩漢文家、歌人であった。官は円融天皇の末年に式部丞に任ぜられたらしく、『小右記』に拠ると、花山天皇の永観二年（西暦九八四）十一月十四日の条、および翌寛和元年四月二十五日の条に「式部丞為時」の名がある。また『小右記』の一条天皇の正暦四年（西暦九九三）正月十四日、および十五日の条に「外記為時」「大内記為時」の名が見えているから両官を兼ねていたのである。[5] その十五日の宮中の内宴に詩人として召され、漢詩を献じたのは「道統、佐忠、為時」の三人であった。ここに掲げた「式部丞」「外記」「大内記」などは、いず

れも儒学を修めて漢文を善く書く者の任ぜられる官であるが、『小右記』に拠ると、この正暦四年七月五日および閏十月十九日の両条において、菅原道真に左大臣を贈られ、また太政大臣を贈られる一条天皇の詔書の草案を為時が書き、同じ年の大嘗会の詔書も十一月十五日の条に為時が草案を書いている。一条天皇がとくに為時の才学を愛したもうたというのは、そのころからのことであろう。『尊卑分脈』にあるごとく、為時が「弁」に任ぜられたのは左右いずれかの「少弁」であることはいうまでも無いが、正暦五年（西暦九九四）の春のあたりのことと想像せられる。ある年の初夏に、右大臣藤原道兼の粟田の山荘に人々と会して、「惜残花」という題で「遅れても咲くべき花は咲きにけり身を限とも思ひけるかな」と詠んだのは、その栄転を自ら喜んだのであろう。道兼は翌長徳元年四月に関白となって、五月に薨じたのであるから、為時が道兼の家でこの歌を詠んだのは、それより以前のことに違いない。[6] それから為時は越前守に任ぜられたが、この任官が一条天皇の特別の思召に出でたことは、『今昔物語』と『十訓抄』とが同一の逸話を伝えているので明白である。誰も知っている有名な話であるが、書き添えておこう。その年の除目（叙任）に越前守の闕を望む者が幾人かあるなかに、為時も申文（任官の願書）を奉ったが、左大臣道長は自分の乳母の子源国守（『今昔物語』には藤原国盛）を採用した。失望した為時は、ふたたび申文を奉ったなかに、「苦学冬夜、紅涙盈巾（瞼の誤か）、除目春朝、蒼天在眼」の句があった。これを御覧になった天皇は、為時に同情あそばされて、供御（御食物）も召し上らずお悲しみになった。これを拝し奉った道長は、改めて為時を任命したというのである。以上は『十訓抄』の伝うるところであるが、『今昔物語』では、道長がこの文章に感じて、改めて為時を採用したことになっている。また『今鏡』に拠ると、天皇が為時を任じたいと思召したのは、越前の敦賀に来舶する支那人らと為時に詩文を唱和させたいお心からであった。敦賀は、九州の唐津や博多と同じく、平安朝以前から朝鮮人や支那人の来舶する貿易港であったが、『小右記』を読むと、長徳二年（九九六）ごろ、とくに

多くの宋人が敦賀へ来ていた。それで私は、為時の越前国赴任を長徳三年と推定する。娘の紫式部を伴って行ったことと、京都を出立したのが六月ごろであったこととは、『紫式部歌集』で推定せられる。式部は敦賀へ、宋人を観にも行っている。私の推定するところでは、式部が二十歳の時である。(7)

為時は国司の任期である四年を満たさずに辞任して京に帰ったらしい。当時は三年もしくは一年でも罷めて帰る国司があり、また四年以上延任し重任する国司もあった。それで為時の越前から京に帰ったのは、長保二年(一〇〇〇)の冬もしくは翌三年の冬であろう。その後十年間ほどは京にいた。『本朝麗藻』の現存本のなかにある為時の漢詩は、概してこの十年間の作である。宋の使羌世昌が京に来た時に、接伴官となって羌に贈った二首の七律は何年の作か知らぬが、詩によると夏のことである。寛弘六年の春、左大臣道長の東三条邸の詩会でも、主人道長、大江匡衡、藤原伊周、藤原頼通、藤原公任、藤原孝道、藤原為義らと共に、「渡水落花舞」という題で七律一首を作っている。またその詩は伝わらないが、『御堂関白記』寛弘四年四月二十六日の条の宮中の宴に、為時は他の文人と共に召されて漢詩を作り、同時に楽人の中にも加わっている。また寛弘六年七月七日の条、宮中の七夕の宴に、他の文人と共に「織女理容色」という題で詩を作り、併せてその序を書いた。同記の寛弘七年九月九日の条、道長の家の重陽の詩会に序を書いている「為清」も、「為時」の誤写であろう。当時「為清」という詩人は他に見当たらない。『尊卑分脈』によると「蔵人」に任ぜられているが、それはこの十年間のことであろうと想われる。

為時が越後の守に任ぜられて、ふたたび地方官となったのは、『大日本史』の「国郡司表」に由ると、三条天皇の寛弘八年(一〇一一)二月である。在任中に、(多分翌々長和二年の秋に)京から遊びに来ていた長男の惟規(のぶのり)が、病気をして歿した。この惟規もまた父と同じく、文章生より「式部丞」となったが、長保五年(一〇〇三)ごろに「少内記」となったらしく、『御堂関白記』

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

長保六年、すなわち改元して寛弘元年の正月十日の条、および翌寛弘二年十一月十日の条に「少内記惟規」とあり、また寛弘四年正月十三日の条には「蔵人」に補せられ、翌五年七月十七日の条には「兵部丞」を兼ねている。この人も漢文を善くしたとともに歌人であり、その歌は『後拾遺集』以下の勅撰集に出ている。『十訓抄』と『今昔物語』とに、大斎院（村上天皇の皇女選子内親王）に仕えた中将という女房と恋をした始めに、門を守る侍に名を問われて、「神垣は木の丸殿にあらねども名告りをせねば人咎めけり」という歌を詠んで、この歌の面白さに、斎院が女房との恋を許されたという有名な艶話が書かれ、『後拾遺集』には、「父のもとに越後にまかりけるに、逢坂のほどより源為善朝臣の許に遣はしける」と詞書して「逢坂の関うち越ゆる程もなく今朝は都の人ぞ恋しき」と詠んだ歌が採られている。急病で死ぬる時に、父が僧を迎えて臨終の偈文を得させようとしたが、惟規は僧が念仏をせねば「中有に迷ふ」よしを述べるのに対して、「中有とはいかなる所か」と質した。「夕暮の広い野のように寂しい所だ」と僧がいうと、惟規は「その野には紅葉が散り、尾花が風に靡き、虫が鳴いているであろう、それさえあらば中有に迷うのも苦しくない」と言って、僧の勧める念仏に応じなかったので、僧は手持無沙汰で逃げ帰った。そしていよいよ死に臨んで、自ら筆を執って「都にも恋しき人のあまたあれば猶この度は生かんとぞ思ふ」と書いたが、最後の「ふ」という字を書くにおよばずして気息が絶えた。まだ若くて、生の愛着の烈しい文人は、いかにも恋しい人々が都に多かったであらう。為時夫婦は、その悲しい絶筆の文字を、後に京へ持ち帰って人々に示して泣いたと『十訓抄』が伝えている。為時はこの愛する長男を失ったことにより、京へ帰りたくなったらしく、任期はまだ残っているが、辞表を京へ送った。すなわち『小右記』の長和三年（一〇一四）六月十七日の条に、「越後守為時辞退状」のことが宮中で議せられている。また、「国郡司表」に「長和三年六月罷」とある。為時は辞任が許されて、長和三年の秋あたりに惟規の遺骨を携えて帰京した。その時紫式部は、「遠き所へ行きし人の亡くなりにけ

るを親はらからなど帰り来て、悲しき事云ひたるに」と詞書して、「いづ方の雲路と聞かば尋ねまし列離れけん雁の行方を」と詠んだ歌を、『紫式部歌集』に遺している。「悲しき事」とは、惟規の臨終の有様なのであろう。この歌に「雁」が詠まれているから、為時の帰京を秋と推定する。

為時は、その翌年の、すなわち長和四年の秋あたりに、もしくはさらに翌年の長和五年の春に、愛女の紫式部を失った。（式部の歿年についてはなお詳しく後に述べる）。『小右記』に拠ると、長和五年五月一日の条に、「一昨日前越後守為時、於三井寺出家」とある。私の想像ながら、近く惟規と紫式部との二愛子に死別した老年の為時は、悲歎の切なるあまりに、一切をなげうって僧となる心を生じたのであろう。彼および彼の二子を愛せられた一条天皇はすでに崩じたもうたとはいえ、皇太后宮（一条天皇の皇后彰子）と摂政藤原道長一家とから、ますます愛重せられる事情のなかにあった為時は、社会的位地に失望し悲観する理由を、すこしも持たなかったはずである。さてここに為時の年齢について考えよう。為時の名を文献の上に最も早く見るのは、『天徳歌合』に「童」として藤原道隆、藤原朝光その他と共に名を列していることである。この歌合は、村上天皇の天徳四年（九六〇）三月三十日に宮中において催されたが、かかる晴れの座の童は、門閥の美童を盛装せしめて一座の花としたものである。この時に道隆は八歳、朝光は十歳であった。両人は、共に右大臣師輔の孫である関係から、とくに年少ながら選ばれたとして、為時は朝光と同年、多くも十二歳を越えなかったに違いはない。しばらく十二歳と推定して逆算すると、村上天皇の天暦三年（九四九）に生まれたことになるから、その出家した年は六十八歳であるが、私は朝光と同年と考えて、すなわち天暦五年（九五一）に生まれたとし、この出家した年を六十六歳と推定しておく。出家後の為時については、『御堂関白記』および『小右記』の寛仁二年（一〇一八）一月二十一日の条に、摂政藤原頼通の家の大饗の屏風に、道長より命ぜられて詩を作った文人のなかに「為時法師」の名が書かれているほかに所見がない。歿した年は不明であ

るが、おそらく七十歳前後で歿したのであろう。為時に、為頼という兄のあったことは前に述べた。この人は『藤原為頼朝臣集』という歌集を遺している。いま一人は陸奥守頼経といい、その歿した時に、為頼も姪の紫式部も、任国の「塩釜の浦」を題にして歌を手向けている。紫式部の母は『尊卑分脈』によると、常陸介や摂津守を経て右馬頭になった藤原為信の女である。為時とのあいだに、前述の惟規のほかに安芸守より常陸介となった阿闍梨良暹、紫式部の姉および紫式部を生んだ。歿年は不明である。

紫式部の生歿年は不明ながら、私は大正の初年に円融天皇の天元元年（九七八）に生まれたと推定したが、今日もこの推定をますます自ら信じたい。すなわち父為時が二十八歳ないし三十歳の時の子である。私がかく推定する理由は、以下追い追いに述べたい。[8] 彼女の少女時代のことについては、『紫式部日記』に彼女自身の書いたところを『大日本史』の撰者が推しひろめて、「資性敏慧、幼時人の書を読むを聞き、すなはち能く諳記す。為時甚だ之を愛し、常に之を撫して曰く、汝をして男たらしめざるを恨む」と書いたごとくであった。『紫式部歌集』を読むと、童女時代からの親友であるという婦人があって、歌を贈答している。原文にある「童友達（わらはともだち）」という言葉をもって考えると、式部は少女時代にいずれかの宮に「童女」として、その婦人と共に仕えていたことがあるらしい。当時は母と小さな娘とが同じ所に宮仕えする習慣があったから、式部も母に連れられて仕えていたかも知れない。その仕えた宮が当時の皇后や女御でない事は、式部が後に一条天皇の中宮に仕えた時に、初めて宮中を観たということを、歌集に自ら書いているので明白である。円融天皇の中宮遵子の御許でないことも、中宮の弟の公任と式部とが、寛弘五年の秋まで交際のなかったので断定される。また斎宮や斎院でないことは、『源氏物語』にわずかに「野の宮」の描写が一箇所あるだけで、両方の宮の生活に筆が著けられていないので、想像せられる。しかし『源氏物語』に書かれたことで想うと、公卿階級の家ではなく、式部はいずれかの宮に仕えて

いたことがあるために、これほどまでに精緻な描写ができたのだと感ぜられるところが多い。それは父や伯父や兄から聞いたばかりでは、書かれそうにないことである。あるいは冷泉天皇の皇后で、当時太皇太后宮と申し奉った昌子内親王（朱雀天皇の皇女）の御許であったかも知れぬが、そのように推定する根拠が、すこしもまだ私に見つからない。(9)

紫式部が少女時代から二十歳までのあいだに修めた教養の深さと大きさとは、その教養を薪として天才の火をつけて書かれた『源氏物語』が十二分に証明している。それに対して讃美の言葉を尽くした安藤為章の『紫家七論』さえも、なお私には言い足りない気がする。上流階級の女子に高等教育の奨励されたことは、奈良朝以前からのことであり、才学ある貴女を紫式部以前にも数えうるのであるが、彼女は当時の貴女が修める高等教育の範囲を越えて、はるかに多くのものを学んだ。自ら音楽（琴）に長じていたのみならず、『源氏物語』には彼女の音楽論がしばしばそれとなく書かれている。『歌集』に拠ると、自ら絵をもかいたが、彼女の絵画論はまた『源氏物語』にたびたび発見される。彼女以前の国文和歌に精通し、その文章が前古にない妙文を創始して天衣無縫の完成を示したのみならず、その歌もまた『源氏物語』に多くの創作を挿んで、他の歌人の歌の単調膚浅なものと異なり、堂々たる大家の作である。昔も今も彼女の『歌集』の歌だけを見て、彼女の歌を貫之、和泉式部、西行などのはるかに下におくのは大間違いの批評である。『源氏物語』の歌ほどの各種多様な佳作を、自由に空想をもって成しえた大歌人は、いにしえの人麻呂を除いて私はほかに知らない。彼女の歌論もまた、今日にさえ通用する卓見を示している。彼女はまた、男の読む国史と支那史、支那日本の漢詩、漢文集、仏教の諸経、有職故実の書に通じ、いろいろの美術品、装飾品、香、書道、衣服その他の色彩、四季の風景の鑑賞等について、高雅なる趣味と見識とを備えていた。さらに驚かれることは、彼女の思想の超凡なること、直覚の鋭くて正しいこと、同情の遍ねくして繊細にかつ深きこと、僻んだり意地

悪く考えたりするところのないこと、恋愛を幾様にも書き分けて、いずれにも人情の真実を描き、無稽と空疎との跡のないこと、人間性の内部に徹して観察しながら、それを客観的に肉づけて描写する筆力の精確なること、創造力も旺盛であったが、記憶力も勝れていたことなど、一々にいえば際限がない。これらのことは普通の教養とか教育とかいうもので修めえられるところでなく、天才は特別の素質的叡智によって飛躍して進むから、多くは一を聞いて十百を頓悟して得たものであろうが、しかしまた学者であり芸術家である父や伯父たちや兄たちが、彼女に多くの美しい感化を与えたところがあろうと想われる。そのうえに私は、曽祖父の兼輔から伝えたその家の伝統が彼女を培養するのに良い土壌であったと考えずにいられない。また彼女の心の奥に、「上達部(かんだちめ)の子孫である」という自重自負が潜んでいて、ひとり自ら励むところもあったであろう。私は十二、三歳から『源氏物語』を繰返して読んで、読むたびに彼女の偉大さが加わるのを覚える。

紫式部は少女時代から歌を詠み習い、また十五、六歳から短編小説に筆を著けたであろう。そうでなければ、いかに天才としても、一躍して『源氏物語』の文章と歌とが作られるものでない。歌は搢紳階級の男女に古代から行なわれていたが、短編小説に書くことは彼女の祖父時代から始まって、近年は非常な勢をもって流行するのであった。すなわち清少納言の随筆集『枕草子』にも『源氏物語』にも、当時に読まれた短編小説の名が多く引用されている。そのなかで今日も残っているのは、『竹取物語』『空穂物語』の類にすぎない。その他のものは、『源氏』が一たび出て以後、全く光を失って滅んでしまったのである。それらの短編小説が『源氏』の先駆をつとめたには相違ないが、『空穂』のような幻奇小説、『竹取』のようなお伽小説、それらに類似した幾十種の小説にすぐつづいて『源氏』のような写実小説が、女子の筆をもって質も量も大きな成績を示して出現したのは、奇蹟的事実といわねばならない。さて紫式部が『源氏物語』に筆を著け初めたのは、何年からであろうか。旧説は彼女が

藤原宣孝に死に別れて寡居した以後、すなわち長保三年（一〇〇一）五月以後の三、四年間のこととしている。私も従来はこの説に従って来たが、今日では必ずしも寡居以後としなくてもよい、宣孝の妻となる以前から書き始めていたと見ても差支えないと考える。すなわち式部は、父に伴れられて二十歳の夏に越前に赴き、翌年の春あたりに帰って来て、宣孝との恋愛関係が生じたのであるが、越前に滞在していたうちにも、『源氏』の初めを書いていたかも知れない。私は『源氏』が、最初は「帚木（はははきぎ）」の巻から書かれ、よほど後に至って「桐壺」が首巻として加えられたものと感じている。それにはいくつかの理由を挙げうるが、一つは「桐壺」の文章の整然として一点の疵もなく、かつ堂々とした重味を持って完璧の美を示しているのに比べて、第二巻の「帚木」には渋滞した筆の跡のあることが目につく。また一つは雨夜の徒然に若い貴公子が集まって女の批評を交換する「帚木」の結構は、若い読者の心を引きつけるに十分であり、作者がこの巻を総序として、その夜の批評に上った種々の女を具体的に書き分けようと考えつきそうなことである。なお「桐壺」が後に加えられたために、他の巻と矛盾を生じた点さえ私には発見される。またおそらく初めの意図は、あんなに長い小説を書くつもりでもなく書き出したのが次第に感興を加えて、そのうちに長編とする心にもなったのであろう。[10] それで私は、宣孝と婚せぬ二十歳以前、あるいは宣孝の生前から筆を著けていたと見てもよいのである。

紫式部が父為時の任地越前国へ両親に伴われて行ったのは、長徳元年（九九五）であった。私の推定する彼女の年は、その時十八歳であった。私が前段に長徳三年と書いたのは誤りである。『本朝通鑑』の長徳元年の記事に、「正五位下藤原為時任越前守」とあるのに拠って訂正する。これで想うと、為時はこの年の春任官して四月の初めにまだ在京し、右大臣藤原道兼の粟田の山荘の歌会で「惜残花」という題に托して、自祝の意を述べたのであったが、数日の後に関白藤原道隆が薨じ、次いで関白となった道隆の弟道兼がまたつい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com